

研究ノート

ラカン派精神分析の解釈についての覚書：
逆方向の解釈としての切断を中心として

赤 坂 和 哉

Notes on the Interpretation in Lacanian Psychoanalysis: Focusing on the
“Interpretation in Reverse” Concretized by Cut

Kazuya AKASAKA

函館短期大学紀要

第 49 号

2022 年 3 月

【研究ノート】

ラカン派精神分析の解釈についての覚書：
逆方向の解釈としての切断を中心として

赤坂和哉

Notes on the Interpretation in Lacanian Psychoanalysis: Focusing on the
“Interpretation in Reverse” Concretized by Cut

Kazuya AKASAKA

要旨

本研究では、事例では示されていない「逆方向の解釈」および「切断」という実践を検討し、そのような解釈を具体化することを目的とした。その際には、ラカン派の中心的なグループである「フロイトの大義学派」の議論を拠り所にした。

筆者は、まず、以下のようにラカン派における解釈を整理した。①ラカン前期および中期における解釈は、句読点、事後性、多義性という特徴を有しており、意味を生じさせる意味論的な解釈である。②ラカン後期における解釈は、意味が生まれる方向とは逆に作用するという意味で「逆方向の解釈」であり、その実践が「切断」という非意味論的な解釈である。次いで、この「切断」の具体的な一つの方法は、シニフィアン1とシニフィアン2が結びついて意味が完了する前に、シニフィアン1とシニフィアン2を切り離すことであることを論じ、中期から後期におけるラカンとの分析実践の記録で、沈黙とともに室内を歩き回る等のラカンの様々な行為を確認した。そして、最後に、そのようなラカンの行為は、「切断」という実践の具体例、つまりは一つの分析的行為として理解することができる可能性を指摘した。

キーワード：ラカン後期、逆方向の解釈、切断、非意味論的、多義性

1. 目的

精神分析では、伝統的に解釈が技法において重要な位置を占めてきた。解釈は、基本的には、分析主体 (analysant)^{*1} が自由連想で表現する言葉や態度に対して、分析家が言葉を通して伝えるものである。何を対象にするのかという観点からは、解釈は内容解釈、防衛解釈、転移解釈に分けられる。また、伝える内容の観点からは、発生論的解釈、神秘的解釈など、与える効果などの質の観点からは、変容性解釈、当を得た解釈などにも分類される。

フランスの精神分析家であるJacques Lacan (以下、Lacan, J.) の教育活動 (enseignement) に基づき、Jacques-Alain Miller (以下、Miller, J.-

A.) は、精神分析における解釈について、次のように述べている。

「分析的解釈の諸理論は、分析家たちのナルシシズムを立証しているに過ぎません。[...] 解釈するのは無意識です。[...] 解釈するのが分析家の無意識であるというのは誤りです。

[...]。

反響させること、暗に言うこと、言外に匂わせること、沈黙すること、神託を生じさせること^{*2}、引用すること、謎を生み出すこと、半ば言うこと

*1 分析主体とは、分析家とともに自ら精神分析をしている者で、いわゆる被分析者のこと。

*2 オイディプスに知らされたアポロンの神託のような、理解しがたい謎めいた多義的な分析家の言葉のこと。

*3、暴露すること、誰がそれをするのでしょうか。あなた以上にうまく解釈するのは誰なのでしょう。[・・・] あなたではないなら、無意識そのものです¹⁾。

Miller, J.-A. は、この「無意識が解釈する」こととは反対に進む解釈が「逆方向の解釈 (interprétation à l'envers)」であり、その実践方法を「切断 (coupure)」であると語っている。しかしながら、Lacan, J. 自身も、そして Miller, J.-A. もまた、切断について症例を用いて例示はしておらず^{*4}、切断が何を示しているのかは必ずしも明白ではない。そこで、本研究では、逆方向の解釈および切断を検討して、より具体化することを目的とする。このことは、逆方向の解釈および切断を臨床実践に用いるための一助となろう。

ところで、解釈の動作主は、最初に記述したとおり、基本的には分析家とされている。しかしながら、ラカン派では、解釈をする動作主は分析主体とも考えられており、前述したように、解釈の動作主を無意識とする見方もある。本研究では、基本的には、分析家の解釈と分析主体の解釈を扱うが、混乱を避けるために可能な限りどちらの解釈であるのかをわかるように「分析家の解釈」や「分析主体における解釈」といったように記述するように心掛けた。

尚、ラカン派精神分析には、ドイツやフランスの古典的精神医学の影響および Freud, S. の議論を踏まえて、精神病、倒錯、神経症という診断カテゴリーがあり、近年は、ラカン後期にとりわけ強調される享楽 (jouissance)^{*5} の多様性の観点から、自閉症を第四の構造であるとする考えや、普通精神病 (psychose ordinaire)、普通倒錯 (perversion ordinaire)、一般化倒錯 (perversion généralisée) などの臨床的な概念があるが、本研究で論じる分析家による解釈の対象となるのは、ラカン後期に上記の診断カテゴリーの区分が明確でなくなることを踏まえて、あらゆる分析主体を想定しつつも、基本的には、意味がないことも含めて意味を重要視する神経症者を念頭においていることをここに記しておきたい。

2. 方法

本研究における逆方向の解釈および切断の検討に際しては、Lacan, J. の著作である『エクリ』の索引作成を任せられ、Lacan, J. のセミナーである

『セミネール』シリーズの編纂者でもある、Miller, J.-A. の未刊行の講義録、および Miller, J.-A. を中心とするラカン派の一学派であるフロイトの大義学派 (École de la cause freudienne) の論文を参照した。それは、現在、Miller, J.-A. のラカン理解がその明確さにおいて一定の評価がなされており、ラカン読解においては Miller, J.-A. による解釈は避けては通ることはいかないものとなっているからである。

3. 結果

(1) ラカン前期の解釈

Miller, J.-A. は先の引用で「解釈」を「反響させること、暗に言うこと、言外に匂わせること、沈黙すること、神託を生じさせること、引用すること、謎を生み出すこと、半ば言うこと、暴露すること」と述べているが、ここに列挙されている解釈は、沈黙すること以外、基本的には分析家が分析主体に対して分析主体にとって何かを意味することを言うことであり、また、句読点を打つことで事後性によって意味が生み出されることである。

句読点を打つことで事後的に意味が生まれることについて、少し説明を加えると、比較的よく知られていることとして、聖書の原典には句読点がなく、句読点を打つ場所によって、様々に意味が変わる。つまり、句読点を打つと、それまでに語られていることの終わりが規定され、それによってそこまでに語られていたことの意味が遡って確定される。この「遡って」を精神分析では事後性 (après-coup) と言い、句読点の打ち方によって、事後性をもとに、様々な意味を生み出すことが、精神分析における分析家および分析主体の解釈であると言えよう。

Fink, B.²⁾ が挙げている例を確認してみよう。それは男性の分析主体がある女性について次のよ

*3 象徴的なもので覆えず言い当てられない現実的なものである穴や真理について言うことであり、それはこの「すべてを言い当てられない」ことで謎を生むことになる。

*4 精神分析、とりわけラカン派においては、主体の個別性を重要視する。そのため、万人に適応可能な解釈の仕方と見なされるような、解釈とその効果といった具体的な記述を症例で提示することは避けられる傾向にある。

*5 享楽とは、きわめて単純には、Freud, S. の欲動のことであり、生の欲動と死の欲動を束ねたもので、神経症者の場合、生の欲動としては幻想において快を享楽し、死の欲動としては症状において苦しみを享楽している。

うに言い、そのあとに分析家が、それを引用して、意味を反響させる、句読点を打つことをしている。

—分析主体：私に対する彼女の関心が萎えていた。(Her regard of me was withering.)

—分析家：萎える？(Withering?)

Fink, B.によれば、この解釈によって、分析主体は「萎える」を性的な意味と、自分についての彼女の良い意見が減っていったという意味との両方に聞いたという。そして、「関心 (regard)」という語が、「熟視 (gaze)」や「見る (look)」に理解できることに気づき、彼女によって見られていることが彼を萎縮させていた (made him wither) ことを認識したのであった。

このような意味の水準で機能する解釈は、後の議論を踏まえると「意味論* 的な解釈」である。その理論的な背景は、ラカン前期における象徴的なもの (symbolique)^{*7}としての無意識という考え方であり、この時期Lacan, J.は、無意識は分析主体の周囲の人たちが語ったことで形作られているもの、そこに症状の意味が書き込まれているところ、シニフィアン (signifiant)^{*8}が連鎖している場所等と考えた。それはこのような言語的な無意識を支えている一つのシニフィアン (Φ)があるから可能なのであり、それをLacan, J.は「大文字の他者 (A) の大文字の他者 (Φ) は存在する」と定式化した。

以上より、ラカン前期における解釈は、句読点、事後性、多義性という特徴を持ち、意味を生じさせる意味論的な解釈である。

(2) ラカン中期の解釈

先のラカン前期の解釈の検討では外していた、沈黙することはスカンション (scansion) と共に、ラカン中期の考え方に根ざした解釈である。沈黙することに関しては、そのまま分析家が黙っていることであるというのは、容易に察せられることであるが、スカンションには説明が必要と思われる。

スカンションは「区切ること」とも訳され、通常の精神分析における面接時間が1回45分ないし50分であるところを、45分や50分に満たない時間で面接を切り上げるという方法^{*9}である。そして、この解釈は、ある時点で面接を区切って終わらせるために、句読点として作用する。つまり、分析家側では、何も語らないのであるが、分析家がそ

こで面接を終わらせたことに分析主体は何かしらの意味を探すことになる。分析家は何も語らず、分析主体が意味を求めるということに関しては、沈黙にも同じことが言える側面がある。そして、後述するように、沈黙は分析家の行為と一緒になされることで、分析主体における意味の探求の側面がより際立つことになる場合がある。

それでは、スカンションの一例を確認しよう。Skriabine, P.³⁾は自閉症の弟を亡くした分析主体と関わっていて、次のような場面で面接を区切った。

—分析主体：弟の死の夜、三人で話しました。

—分析家：三人？

—分析主体：ええ、そうです。三人です。両親に、妹[姉]、…自分を数え忘れました！

—分析家：(スカンション)

Skriabine, P.によれば、このスカンションによって、ある相互依存関係の中で分析主体を維持して固定している、亡くなった弟への同一化に関する作業が開かれたとのことである。

この例に見られるように、このスカンションという解釈も基本的には「意味論的な解釈」である。ラカン中期においては、想像的なもの (imaginaire)^{*7}としての無意識が構想されており、無意識は想定された知として、ある意味では幻想として考えられている。それは、この時期においては、大文字の他者 (A) は欠如しているとされ、この意味で「大文字の他者 (A) の大文字の他者 (Φ) は存在しない」と言われていることに起因している。

*6 Morris, Ch. W. による記号論の三分類の一つであり、意味論は、言語表現の意味や指示対象を論じるものである。他には、語用論と統辞論がある。

*7 Lacan, J.は人間の精神構造に関して、象徴的なもの、想像的なもの、現実的なものという区分を設けた。端的に言えば、象徴的なものは、象徴界とも訳され、言葉によって同定できるものであり、想像的なものは、想像界とも訳され、イメージによって同定できるものがある。そして、現実的なものは現実界とも訳され、言葉でもイメージでも同定できないものである。

*8 シニフィアンとは、言語記号における記号表現、つまりは、聴覚映像、音素のこと。

*9 このスカンションによって生じる面接は、短時間セッション (séance courte) と呼ばれるが、可変時間セッション (séance à durée variable) とも呼ばれるように、45分や50分を超えた時間の面接を実施する分析家もいる。

*10 対象aとは、欲望・転移・不安・幻想に関わる対象である。

存在しない大文字の他者 (Φ) の欠如を埋めるのは、見せかけ (semblent) としての対象 a (objet a)^{*10} であり、そのおかげで、意味はあたかも大文字の他者 (A) に存在しているようなものとして見いだされるのである。

しかしながら、意味や真理はこのような見せかけの影響のためにフィクションとなり、ラカン前期におけるように、症状の意味は解釈で名指された真理であるとは確定されずに、複数の真理が存在することになり、分析主体は次々と意味を数え上げることが可能になる。それは、正しい解釈は存在しない、解釈には際限がないことと同義である。そして、このような無意識の構造の下、分析家が明示的な内容を持つ解釈をすれば、分析主体はそれを正しい意味である真理として受け取り満足して、意味や真理を数え上げることをやめてしまう場合があり、さらなる分析の進展は望めなくなってしまう。そのため、分析家が何も言わないことで解釈の内容が非明示的になる、沈黙やスカンションが重要な解釈となる。

よって、ラカン中期における解釈は、分析家は語らないが、前期と同様に、句読点、事後性、多義性という特徴を持ち、意味を生じさせる意味論的な解釈である。

(3) ラカン後期の解釈

ここまで確認した解釈は、Lacan, J. が「分析家の解釈とは、この無意識が私が言ったようなもの、つまりはシニフィアンの戯れであるなら、[...] 無意識の形成物^{*11} という形で行っていた無意識自身の解釈をただ辿っているにすぎません」⁴⁾ と述べていることを一つの論拠とする「無意識が解釈する」範疇にある解釈である。それは無意識が象徴的なものや想像的なものとされているラカン前期や中期に見られる解釈であり、分析主体において何かしらの意味を生成させる解釈であることから、意味論的な解釈であった。

しかしながら、そのような解釈は快感原則に仕え意味で症状を養ってしまう。つまり、分析主体は症状をはじめとした無意識の形成物を次々に解読することに享受するのであり、意味で満足する一方で、次の満足を得ようとすることで、分析は終わりなきものになってしまうのである。そこで、Miller, J.-A. はそうではない解釈として、本研究における中心的なテーマである逆方向の解釈 (interprétation à l'envers) を提案する。Miller, J.-

A. を引こう。

「このポスト解釈という解釈 [逆方向の解釈] は正確に言ってもはや句読点を打つことではないのです。

句読点を打つことは、意味作用のシステムに帰属しています。それは常に意味論的です。[...] ポスト解釈的な実践は、日々解釈に取って代わっており、句読点にはではなく切断 (coupure) に標定されるのです。

この切断をひとまず S1 と S2 の間の分離として想像しましょう。それは分析的ディスクール (discours analytique)^{*12} のマテームの下段にある S2/S1 として書き込まれています。

[...]

問題は、セッションが長いのか短いのか、沈黙がちなのか話しているのかを知ることではないのです。セッションが意味論的な単位であるのか、[...] 分析的なセッションが非意味論的であるのかが重要なのです。

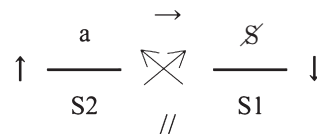
したがって、私はここで練り上げという経路に対して困惑 (perplexité) という経路を対置します。[...]。

まさしく分析的な解釈は、その語を保持しましょう、無意識の逆側や裏面で作動するということを [...] 提案します¹⁾。

要点は、逆方向の解釈は、切断であり、句読点によって意味が生まれる方向とは逆に作用するという意味で、非意味論的であって、それはマテーム

*11 無意識の形成物には、他に夢、機知、言い間違い、失錯行為などがある。

*12 分析的ディスクールとは、精神分析家のディスクールのことで、精神分析する (psychanalyser) あるいは治療する (guérir) 性質を備えている。それは以下のように表記される。



各記号に関しては、S1は主人-シニフィアン (signifiant-maitre) を示しており、それは、最初のシニフィアン、外傷、主人等であり、S2は知 (savoir) とりわけ無意識の知を表しており、それはS1につづくすべてのシニフィアン、奴隷等である。Sは無意識の主体 (sujet de l'inconscient)、分割された主体であり、a は対象 a (objet a) や剰余享受 (plus-de-jour) を意味している。

ム (mathème) と呼ばれる分析記号では「S2//S1」と記される、ということである。

このマテームについて付言すれば、S1とS2の間に断絶を表す「//」があることは、意味を生じさせないことを示している。きわめて単純には、シニフィアンは単独ではなく連鎖されて (S1-S2) 事後的にはじめて意味を生むと考えられているが、このマテームが示していることは、S1とS2は連鎖されず意味が生じないということなのである。このような非意味論的という点をGuéguen, P.-G.とともに、もう少し検討してみよう。

「意味の逆方向に広がるものとしての解釈の話すれば [・・・]、それは、解釈が分析家の行為と同等になるとき、解釈は単に無意識の活動に対して二義的でなければならぬだけでなく、意味の減算によって無意識として作用しなければならない、ということ強調することです。それは、ラカンがセミナー11で非合理的なもので非一意味なもの (in-sensé) と名付けたものを産出しなければならない、ということ⁵⁾。

「逆方向の解釈は、現実的なもの (réel)^{*7}の中の原因に狙いを定めており、また、無意識の予約購読を取り消された主体を産出する切断にも狙いを定めています⁵⁾。

この二つの引用からわかるのは、逆方向の解釈＝切断は、無意識を開き、無意識において意味を減じる作用を及ぼし、非合理的なもので非意味なもの (in-sensé) という意味のない地点に、読み解かれることのない無意識に、主体を導くということである。そして、そのような状態はS1を単離した状態であると言われている。

「切断が無意識のゾイデル海^{*13}を干し、S2なしにS1を単離することを詳しく説明しつつ、ミレールは知を想定された主体の失墜といわれる問題を明らかにします。知を想定された主体の失墜は、分析の終わりとその必然的な帰結のことで、すなわち無意識の予約購読の取り消しです⁵⁾。

このS1が単離された状態とは、S1以降のすべ

てのシニフィアンを表現しているS2と結びつかないS1があるという状態、「この解釈 [逆方向の解釈] は、いわばシニフィアン連鎖の外にS1を飛ばさせながら、ひとつきりのS1 (S1 tout seul) を出現させる方法を知っているのでしょうか⁵⁾と」⁵⁾と言われるように、ひとつきりのシニフィアン (signifiant tout seul) だけがある状態である。

このひとつきりのシニフィアンは、他のシニフィアンと結びついて意味を生んだり、二重語義として意味が固定されたりせず、敢えて言うなら、意味が不確定になるように機能する。このS1というシニフィアンは、隠喩という形でその意味作用をS2には及ぼさず、シニフィアン同士は換喩の形で上滑りしていくのである。

分析家による逆方向の解釈＝切断によって、分析主体をシニフィアン同士の横滑りといった状態に導く、分析主体における解釈の具体例としてLacan, J.が挙げるのは、アイルランド出身の作家であるJames Joyce (以下、Joyce, J.) による『フィネガンズ・ウェイク』である。

「まさにここで、この別の次元の解釈へと進むために、ラカンは『フィネガンズ・ウェイク』に訴えるのです。そのテキストは止むことなくパロールとエクリチュールの関係、音と意味の関係を享樂します。[・・・] あらゆるクッションの綴じ目 (point de capiton)^{*14}はここでは時代遅れで無効化されています。したがって、このテキストは [分析家等の] 解釈や翻訳を呼び寄せないのです。それはそれ自体がある解釈なのではなく、[分析家等の] 読解の主体をララング (lalangue)^{*15}の中で主体の要素的現象としての困惑 (preplexité) に驚異的な程に連れて行くのです¹⁾。

ここで、上記引用の理解を容易にするために、『フィネガンズ・ウェイク』の最初の一文だけを確認しておきたい。

^{*13} ゾイデル海は、大堤防によって海と隔てられ湖となり消滅したオランダにあった湾のこと。大堤防を切断になぞらえ、孤立して湖となったことを単離されたS1に掛けている。

^{*14} クッションの綴じ目とは、あるシニフィアンがもう一つのシニフィアンとの関係で事後的に意味が生成されて確定される点のこと。

^{*15} ララングとは、喃語 (lallation) をもじったLacan, J. による造語で、自体愛的な享樂を伴う言語のこと。

riverrun, past Eve and Adam's, from swerve of shore to bend of bay, brings us by a commodius vicus of recirculation back to Howth Castle and Environs⁷⁾.

この文には、riverrun という river と run が合成された造語が見られ、past は pass の過去形の passed と音の面で響き合っており、Howth Castle and Environs の頭文字 HCE は、この物語の主人公 Humphrey Chimpden Earwicker の登場の先触れをなしている等、この文の他の箇所にも様々な含みがあることが指摘されている。

林はこの文を Stewart, J. I. M. の理解に基づき、次のように訳している。「川の流れ、イヴ・アダム寺院を過ぎ、河口身をよじらせるところ、深い入り江にそそぎ、滑らかな循環のヴィーゴの道をたどって、ハウス・キャスルとその周辺に我々を連れ戻す」⁶⁾。

また、柳瀬は、音と意味が複雑に絡み合ったテキストであること念頭に置き、以下のような訳を提示している。「川走(せんそう)、イブとアダム礼盃亭(れいはいてい)を過ぎ、く寝ねる岸辺から輪(わ)ん曲する湾へ、今(こん)も度(ど)失(う)せぬ巡(めぐ)り路(みち)を媚行(ビコウ)し、巡り戻るは栄地四圍委蛇(えいちしい)たるハウス城とその周円(しゅうえん)」⁷⁾。

以上のような議論を踏まえると、ラカン後期においては、分析家は何も語らずに面接を切断し、分析主体は、シニフィアンやエクリチュールの点から一つの意味には固定されない多義的で曖昧なことや駄洒落を言い、同時にそのことに自らが享受するような状態が構想されている。つまり、ラカン後期における切断という解釈は、意味を生み出す句読点や事後性を機能させず、意味の水準にはない多義性や曖昧さに拠って立つ「非意味論的な解釈」なのである。

この理論的背景は、現実的なものとしての無意識であり、Lacan, J. は晩年に、意味が除外されている現実的なものとの関連で、無意識を駄作としての知、そして後期における最後の時期^{*16)}に、無意識を一つの重大失敗と語った。それは、中期同様に「大文字の他者 (A) の大文字の他者 (Φ) は存在しない」ことに基づくが、後期には「大文

字の他者 (A) には穴がある」と言われ、穴に位置していたはずの大文字の他者 (Φ) を補填しているのは一なるもの (Un) のシニフィアン、ひとつきりの S1、分析主体の特異性 (singularité) であるという考えに拠っている。

これまでに論じた解釈については、動作主や意味の観点から、次のように整理できる。

Table 1 ラカン派精神分析の解釈

分析的行為	分析家の解釈	分析主体の解釈	マテーム	作動水準
解釈	意味	意味	S1-S2	意味論的
スカンション	非意味	意味	S1-S2	意味論的
切断	非意味	非意味	S1/S2	非意味論的

4. 考察

ここまでの解釈についての議論は、一方では「無意識は解釈する」というテーゼに関して、象徴的な無意識と想像的な無意識において、意味論的な解釈が作動するということであり、そのような分析家の解釈としては、謎を生み出すこと、反響させること、神託を生じさせること、半ば言うこと、沈黙、スカンションなどを見てきた。他方では、現実的な無意識において、非意味論的な解釈が作動すること、また、そのような逆方向の解釈としての切断を確認した。この切断がラカンの最晩年の実践である。Miller, J.-A. を引こう。

「結局は、完全に最後のラカンの教え、そして完全に最後の実践における、分析的行為のモデルは、切断です」⁸⁾。

そして、この分析家側の切断によって、分析主体側にはひとつきりのシニフィアン (signifiant tout seul) である S1 が析出され、それは S2 と結びつくことなく、様々なシニフィアンと離断し、次々に非意味のものを生み出す。このような状態は Lacan, J. によってサントーム (sinthome) と名付けられた。それは、症状 (symptôme) の古い綴りであり、解読できる象徴的な症状ではなく、症状の残余物としての解読されない現実的な症状のことであり、空の (vide) 意味作用に貫かれた

^{*16)} Miller, J.-A. にしたがえば、ラカン最後期は、セミナー24『一つの重大失敗からわかる気づかないこと、それは愛である』(1976-1977) およびセミナー25『結論のとき』(1977-1978) で構成される。

シニフィアンや意味の戯れのことである。Miller, J.-A.が『サントーム』における解釈に関しては、もはやまったくもってそれしかないのです。つまり、意味の上の戯れに送り届けられた解釈です⁹⁾というのは、このことを指している。

Joyce, J.におけるサントームである『フィネガンズ・ウェイク』に見られるように、意味やシニフィアンの戯れ、「享樂と享樂的な意味の間で曖昧な言葉遣いをすることや駄洒落を言う」⁵⁾という点に着目すれば、逆方向の解釈 (interprétation à l'envers) は「散乱する解釈」と訳すことも可能ではないだろうか。

この逆方向であり意味が散乱していく分析主体における解釈は分析家による切断で生成されることになるが、臨床実践への適用を念頭に、切断をより具体化するために、ここでLacan, J.自身の臨床実践を確認し、Lacan, J.の晩年の臨床実践における行為が、そのような解釈として作用する可能性があるのかを考えてみたい。

Haddad, G.はラカン中期から最後期にかけてLacan, J.から分析を受けており、自身の分析経験を著している。彼は、スカンションによって面接が20分ほどで中断される短時間セッションのみならず、数分の短時間セッションや3、4語を発して終わりという超短時間セッション、さらには、一言も発せずに終わるゼロセッションを体験しており、「ラカンはこの短い時間を混乱させ (perturber) ようと工夫を凝らしていた」¹⁰⁾と述べ、その工夫として、以下を挙げている。

- ・文書を読みながら部屋を歩き回る
- ・机に座る
- ・大きな音を立てて紙をホチキスでとめる
- ・引き出しに詰まっている紙幣を数える
- ・文字を書く
- ・新聞を読む
- ・寝椅子に近づく

そして、ラカン派の分析家から分析を受けていたPape, G.¹¹⁾も、分析主体が現実的なものに出会うためのラカン派のアプローチとして、面接を切断することが最も効果的であるとしつつ、上記のLacan, J.の行為と似たような、束の間の不安や瞬間的な混乱を生起させる、分析家の行為を報告している。

- ・あくびをする
- ・机の上の書類を動かし音を立てる

このような沈黙においてなされる分析家の行為は、どのように捉えることができるだろうか。まず、Floury, N.は次のように語り、分析家は非意味論的な水準で分析主体に対して効果を持つような分析的行為をする必要があることを指摘していることを確認したい。

「[症状に意味を与えないように] 黙っていなければいけないということは、自分の欲望を出現させてはいけないという意味ではない。分析家として存在することを望むのならば、行為を起こさなければいけない。これが有名な分析的行為 (acte psychanalytique) である。もちろん、非常に饒舌な解釈によって、それ自体多義的な意味の場を過剰に与えるようなことはしてはならない。しかし、分析家はそれでも分析主体に対して効果を持つような方法で行わなければならないのである」¹²⁾。

そのような分析的行為として切断があることがこれまでの議論であったが、それが非意味論的な解釈として機能するには「意味を断ち切る」ことが一つの方法となる。

「句読点を打つこと、クッションの綴じ目を置くことは、ある観点からすれば、意味を締めつけて閉じる、つまりは意味を閉じ込めて固定する。それに対して、セッションを切断することは、意味を断ち切る。そうするために、セッションは短くしなければならず、より正確に言えば、セッションは文字通り短くさせられねばならず、文学的に言えば、意味が閉められ完了する前に切断は行われなければならないのである。そうすると、セッションは非意味論的なものに留まる」¹³⁾。

つまり、非意味論的な解釈に向けて、意味が完了する前に切断する、換言すれば、S1とS2が結びつく前に切断するのである。

Miller, J.-A.の主張を素朴にLacan, J.の晩年の実践に重ね合わせるのであれば、Lacan, J.は、上記のように沈黙の中で様々な行為をすることを通して、S1にS2が結びつくことを切断しており、その結果として、分析主体が語ることの意味が宙づりにされることで、面接自体が非意味論的な

のようになるように試みていた——この過程で、分析主体は混乱したり、Miller, J.-A. が指摘するように、ララングとの関連で困惑することになる——と考えることも可能だろう。このように考えれば、Lacan, J. の沈黙をベースにした様々な行為は、切断という分析的行為の一つのヴァリエーションと見なすことができよう。

最後に、本研究における限界と今後の課題について述べておきたい。

まず、限界の一点目は、これまでに議論を明確にするために、Lacan, J. の教育活動の時期ごとに対応する分析的行為を示してきたが、実際には、それぞれの分析的行為は厳密には分けられないということである。それは、単純には、Lacan, J. の教育活動の深化をベースに、それぞれの分析的行為には、解釈とスカンシオンにおける意味生成、スカンシオンと切断における面接を終わらせることといった、重なりがあるからである。しかしながら、そのような分析的行為においては常に曖昧さや多義性に注意が払われていることは指摘しておきたい。

限界の二点目は、解釈や分析的行為についてその動作主を分けて議論してきたが、こちらも厳密には分けられない。というもの、Haddad, G.¹⁰⁾ が自らの分析において対象aを無 (rien) であると解釈して、その後Lacan, J. によって対象aの五番目の用語として「無」が加えられたことを報告しているように、精神分析は分析家と分析主体のそれぞれの解釈がある種混じり合いながら知となり更新されていく側面があるからである。

そして、限界の三点目は、切断という解釈の議論に関しては、切断とその効果についての十分な事例研究の蓄積がない現状があり、そのため、展開されている議論はあくまでも文献に基づいた一つの解釈に過ぎないということである。

この点は、今後の課題とつながる点であり、今後とも、フランスにおけるラカン派の実践面での動向に注目し、切断という解釈の臨床的な価値について検討を重ねたいと思う。

付記：本論における引用文では、本論の主旨等に合わせて、邦訳や専門用語に関して、適宜、訳語を変更した。また、[] は筆者による補足を示している。

引用文献

- 1) Miller, J.-A. L'interprétation à l'envers. *La Cause Freudienne*. 1996, **32**, 10-13.
- 2) Fink, B. "Punctuating". *Fundamentals of Psychoanalytic Technique: A Lacanian Approach for Practitioners*. New York, W. W. Norton & Company, 2007, 44. ブルース・フィンク. "句読点を打つ". 精神分析技法の基礎：ラカン派臨床の実際. 椿田貴史・中西之信・信友建志・上尾真道訳. 東京, 誠信書房, 2012, 56.
- 3) Skriabine, P. Evidences ou questions? *La Cause Freudienne*. 2004, **56**, 112.
- 4) Lacan, J. "Présence de l'analyste". *Séminaire livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*. Miller, J.-A. Paris, Seuil, 1973, 118. "分析家の現前". セミナール第11巻：精神分析の四基本概念. 小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳. 東京, 岩波書店, 2000, 170.
- 5) Guéguen, P.-G. Discrétion de l'analyste dans l'ère post-interprétative. *La Cause Freudienne*. 1996, **34**, 26-27.
- 6) Stewart, J. I. M. *Writers and their work no. 91: James Joyce*. London, The British Council and the National Book League by Longmans, Green & Co, 1960. ジョン・イネス・マッキントッシュ・スチュアート. 英文学ハンドブック「作家と作品」第2期No. 47. : ジョイス. 林利孝訳. 東京, 研究社出版, 1971, 47-49.
- 7) Joyce, J. *Finnegans Wake*. Ware, Wordsworth Editions, 2012, 3. ジェイムズ・ジョイス. フィネガンズ・ウェイク 1. 柳瀬尚紀訳. 東京, 河出文庫, 2004, 19.
- 8) Miller, J.-A. "Douzième séance du cours". Le tout dernier Lacan. *L'orientation lacanienne: le cours de Jacques-Alain Miller*. 2006-2007, 8.
- 9) Miller, J.-A. "Onzième séance du cours". Le tout dernier Lacan. *L'orientation lacanienne: le cours de Jacques-Alain Miller*. 2006-2007, 4.
- 10) Haddad, G. "Advenir là où c'était". *Le jour où Lacan m'a adopté*. Paris, Éditions Grasset

& Fasquelle, 2002, 121-367.

- 11) Pape, G. "Quo vadis" psychanalyse?. *La Cause freudienne*. 2004, **56**, 149-150.
- 12) Flourey, N. "Cap vers le Reel" . *Le réel insensé: Introduction à la pensée de Jacques-Alain Miller*. Paris, Editions Germina, 2010, 122. ニコラ・フルリー. “現実界に向かつて”. 現実界に向かつて：ジャック＝アラン・ミレール入門. 松本卓也訳. 京都, 人文書院, 2020, 176.
- 13) Stevens, A. L'interprétation lacanienne. *La Cause Freudienne*. 2009, **72**, 139.

